

「天に宝を積みなさい」

ルカの福音書 12:33~40

はじめに

私の家の近所に温泉がありまして、寒い季節になると毎週のように行っています。つい先日も行ってきたのですが、そこでちょっとした事件？がありました。以前そこでもらった無料券があったのでその日はただで入れるなとウキウキしながら行ったのですが、入館して脱衣場まで来た時に財布の中に 80 円しかないことに気がつきました。入館料は無料でしたがコインロッカーは 100 円が必要なのです。仕方なく鍵をかけないままのロッカーに財布とスマホと車のキーと服を置いて入りました。いつもならロッカーの鍵を腕につけて入るのですがその日はもちろんできません。するとロッカーが気になってどうにもいつものように落ち着いてゆっくり入浴できず、途中何度か確認しに戻ったりしてしまいました。まあ、笑っていただいて結構なのですが、きっと皆さんも似たような経験があたりだと思えます。今日の箇所はそんな貴重品の管理について、自分の宝をどこに置けば安心か、ということの話をたとえに挙げ、イエシュアは語り始められます。しかし、ここにもやはり秘められた神のご計画「神の国の奥義」が存在します。そこに焦点を当てつつ、今日もイエシュアの御言葉に目を留めてまいりましょう。主イエシュアの御名により聖霊の助けがありますように。

1. 施しをしなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:33 自分の財産を売って施しをしなさい。自分のために、天に、すり切れない財布を作り、尽きることのない宝を積みなさい。天では盗人が近寄ることも、虫が食い荒らすこともありません。

12:34 あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあります。

まずイエシュアは「自分の財産を売って施しをしなさい」と教えておられます。これをこのように訳された日本語のままに行うことは良いことだとは思いますが。しかし今日の箇所の結論は「人の子は…来る」ということについて、すなわち終わりの日、イエシュアがどのようにして来られるのかという主の再臨についての話へとつながっているのです。この文脈を無視して、人の自己犠牲や慈善事業を勧める教をここで説くのはいかがなものでしょうか。ではヘブル語のその最初の言及をもって神のご計画の視点で解き明かしてみましよう。ここで「施す」という意味で使われているヘブル語ナータン(נתן)は本来、施し与えるというような意味の言葉ではありませんでした。

創世記【新改訳 2017】

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らせ、

1:18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。神はそれを良しと見られた。

1:19 夕があり、朝があった。第四日。

これは神の天地創造の御業の第四日についての記述ですが、ここで「神は…天の大空に置き」という箇所
に聖書で最初のナータンがあります。このように「施す」と訳されたナータンは本来、天に「置く」とい
う意味であり、それはまさにこの後にある「天に…宝を積みなさい」という御言葉につながるのです。で
すからここでイエシュアは貧しい人々に施しをすることを勧めておられるというよりもむしろ「天に…宝
を」ナータン「置く」ことを強調しておられるのです。しかし述べたようにナータンは「神は…天の大空
に置き」という意味ですから、私たちが、人が、ではなく、神である主が、ご自分の宝をこの地上ではな
く天の大空に置く、ということをご計画としておられることに目をとめなければなりません。やがてメシ
アの花嫁である私たち教会は、I コリント 15:51~52、I テサロニケ 4:16~17 の預言にあるとおりによ
みがえらされ、引き上げられ、まさに「神は…天の大空に置き」という御業が成就するのです。

I コリント人への手紙【新改訳 2017】

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、み
な変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちない
ものによみがえり、私たちは変えられるのです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られ
ます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うので
す。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

これらの預言にあるとおり、私たちはただ空中に、そして天に上げられるだけではありません。「朽ちない
ものによみがえり」とあるように、その時与えられる新しい肉体は、決して老いることも衰えることも壊
れることもない完全な身体です。それをイエシュアはたとえてこう言われました。「天に、すり切れない財
布を作り…」と。主は私たちのためにこのような、決して「すり切れない」古くならない、永遠のいのち
という宝を入れるための器、すなわち朽ちない身体を「天に」用意しておられ、そのようなご計画をお持
ちであることをここにたとえられ、奥義として記しておられるのです。この事実にもみ希望を見出し、私
たちの行く先をこの天の事実に見定め、今の私たちの心を、思いを常にそこに「天に」置くことが重要な
のです。

いつも言っていることですが、この奥義は日本語でもギリシャ語でも解き明かせません。聖書の原語で
ありイスラエルの言語であるヘブル語によつてのみ解き明かすことができる「神の国の奥義」です。ちな
みにイエシュアはここで「自分の財産を売って」とも言うておられますが、ここに使われている「売る」
という意味のマーハル(מָכַר)は本来、アブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルに、その兄で
あるエサウが「長子の権利を売る」という意味で初めて使われた言葉です。つまりヤコブとその子孫であ
るイスラエルの民を万民の長子の民とし、神の祝福に与る第一の民、祝福の基となる民とする、その権利
はイスラエルにこそ与えられる、それを認めるという意味がこのマーハルにはあり、まさに「地のすべて

の部族はイスラエルによって祝福される（創 28:14）」という神のご計画が指し示された言葉であり、このイスラエルによって、ヘブル人とも呼ばれる彼らの言葉であるヘブル語によって私たちは神、主の御心、そのご計画を知るといふ祝福に、このようにして今与ることができているのです。そしてやがて「神の国」千年王国ともメシア王国とも呼ばれる御国がこの地に建つその時には、まさにそのような、イスラエルを中心とした統治形態、政治形態が実現し、イスラエルによって全人類が神の祝福を受け、生かされる、という世界が実現するのです。

2. 腰に帯を締め

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:35 腰に帯を締め、明かりをともしていなさい。

先ほどの「施しなさい」という教えをそのまま行うとしたら、それに続くこの教えも当然そのように行わなければなりません。私は教会に通い始めて 50 年以上になりますがこれをそのまま実践している人を見たことも聞いたこともありません。やはりこのたとえもイスラエルの視点が必要なのです。以下の御言葉を見てください。

出エジプト記【新改訳 2017】

12:11 あなたがたは、次のようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、(傷のない子羊の肉を) 急いで食べる。これは主への過越のいけにえである。

これはイスラエルの神、主がモーセを通してその民に語られたものです。なぜ彼らはこのように「腰の帯を固く締め、… (傷のない子羊の肉を) 急いで食べ」なければならなかったのかというと、この時イスラエルの民はエジプトの地において奴隷状態にあり、主が彼らの苦しみの声を聞かれ、預言者モーセを遣わしてこの民を解放し、エジプトの地から脱出させよう、旅立たせようとしておられたからです。ですから「腰に帯を締め」とは、エジプトすなわち異邦人の地から出て行くことを意味しているのです。今私たちが住んでいる日本はイスラエルの地ではなくエジプトと同じ異邦人の地です。やがて私たちはこの地を出て、先ほども述べたように天の大空に上げられます。その時私たちの身体は「ほふられた子羊」とも呼ばれるイエシュアと同じ復活の肉体を得ます。それは「たちまち、一瞬のうちに変えられます」と記されています。それが「(傷のない子羊の肉を) 急いで食べる」という御言葉ともつながって先ほどと同じ、私たち教会に対する神のご計画を指し示しているのです。

またイエシュアは「明かりをともしていなさい」とも言われました。ここで「明かり」と訳されているネール(נֵר)の初出箇所を見てください。

出エジプト記【新改訳 2017】

25:31 また、純金の燭台を作る。その燭台は槌で打って作る。それには、台座と支柱と、(アーモンドの花の形をした) がくと節と花卉があるようにする。

25:37 また、ともしび皿を七つ作る。ともしび皿は、その前方を照らすように上にあげる。

これは幕屋の聖所に置かれた「純金の燭台」の作り方についてのさだめですが、ここにある「ともしび皿」が聖書で最初のネールです。このネールは「七つ」でありそれらをみな「上にあげる」と記されています。ヨハネの黙示録にはこの金の燭台に秘められた意味が明記されており、それは私たち教会です（黙 1:20）。この教会を「上にあげる」、よみがえりのいのちに輝かせ、星のように天の大空に引き上げることが神のご計画であると述べましたがその真理が「明かりをともしいなさい」と言われたイエシュアのこのたとえにもまた表されているのです。ちなみにメノーラーと呼ばれるこの金の燭台は「アーモンドの花」の形をしていましたがこれをヘブル語でシャーケード(תקצף)といい、これが動詞になるとシャーカド(תקצף)となり、その意味は「見張る、目覚めている」となっており、明らかにイエシュアはこの事実を踏まえて次のたとえを話しておられます。

3. 目を覚ましているしもべ

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸を開けようと、その帰りを待っている人たちのようでありなさい。

12:37 帰って来た主人に、目を覚ましているのを見てもらえるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人のほうか帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばに来て給仕してくれます。

ここに「主人が婚礼から帰って来…たら、すぐに戸を開けよう」とするしもべの姿があります。「すぐに戸を開けよう」これもまた先ほどの「たちまち、一瞬のうちに変えられます」という私たち教会のよみがえりの事実を指し示しています。多くの教会ではこの箇所から「目を覚ましていなさい」というようなタイトルで説教がなされ、熱心であれ、怠けるな、がんばれ、というような励ましのメッセージがなされますが、はっきり言って神のご計画に私たちの力は必要ありません。ここでの「目を覚ます」とは復活、よみがえりの意味を持った言葉なのです。一体誰が自力でよみがえることができるのでしょうか。イエシュアでさえ父なる神によってよみがえらされたというのに。こう記されているとおりです。

使徒の働き【新改訳 2017】

5:30 私たち（イスラエル）の父祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスを、よみがえらせました。

I コリント人への手紙【新改訳 2017】

6:14 神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。

このように、幸いなしもべたちとは、イエシュアが来られるまで熱心でがんばっているクリスチャンのことではなく、イエシュアが来られる時に目を覚ます、すなわち神の「御力によって」よみがえらされる私たち教会のことを指しているのです。ですからどうか 24 時間寝ないで祈って聖書を読んでいる人のことだとは思わないでください。

ところでここにも「帯を締め」という記述が見られますが、これは先ほどのものとは違い、アーザル(אזר)といって「力を帯びる（Iサム 2:4）」という意味の言葉です。私たちをよみがえらせるために再び

来られるイエシュアは、今度は幼子のようにではなく、力ある王の王、主の主メシアとして、万軍の主として来られることがこの「主人のほうか帯を締め」というたとえには表されているのです。そして「そばに来て給仕してくれます」という箇所に使われている「仕える」という意味のシャーラト(תָּרַץ)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

39:4 それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。

イスラエルの子ヨセフは主人にシャーラト「仕えることになった」とありますが、それは「彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。」ということの意味しています。父なる神からその全権を委ねられ、その力を帯びてイエシュアはやがて帰って来られます。その事実が、そのような神のご計画がこの「主人のほうか帯を締め…そばに来て給仕してくれます」というたとえには表されているのです。

4. 真夜中と夜明け

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:38 主人が真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても、そのようにしているのを見てもらえるなら、そのしもべたちは幸いです。

このたとえから主イエシュアは朝や昼には帰って来られないことが示されていますが、それは時計で計る時間的なことを言っているわけではありません。「真夜中」を意味するハツオート(חֲצוֹת)と「夜明け」を意味するシャハル(שָׁחַר)それぞれの初出箇所を見てください。

出エジプト記【新改訳 2017】

11:4 モーセは言った。「主はこう言われます。『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に出て行く。

11:5 エジプトの地の長子は、王座に着いているファラオの長子から、ひき白のうしろにいる女奴隷の長子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。

11:6 そして、エジプト全土にわたって大きな叫びが起こる。このようなことは、かつてなく、また二度とない。』

創世記【新改訳 2017】

19:15 夜が明けるころ、御使いたちは口をせき立てて言った。「さあ立って、あなたの妻と、ここにいる二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」

このように、ハツオート、シャハルのいずれも非常に大きな災厄、災難、大きな患難を指し示すものとなっています。このような大きな患難から救い出すようにしてイエシュアは来られ、私たち教会をよみがえらせ、天に引き上げてくださるといことがここには指し示されているのです。

5. 思いがけない時

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、泥棒の来る時間を知っていたら、自分の家に押し入るのを許さないでしょう。

12:40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのです。」

このように、イエシュアはご自身が来られることを「泥棒」にたとえておられます。皆さんは泥棒、盗難の被害に遭われた経験はありますか。泥棒は家に入って物を盗んだらなるべく早くそこから立ち去ろうとしますよね。同じようにイエシュアもこの地上から私たち教会という宝を盗み出したら、とどまってはられません。天に宝を持って帰って行かれます。ですから今日の箇所にはイエシュアの地上再臨の前に起こるイエシュアの空中再臨、教会の携挙と呼ばれる神のご計画が表されているのです。そしてそれは「思いがけない時に来る」とイエシュアは言っておられます。それは一体どのような時でしょうか。これもヘブル語で読み解くことができます。「思いがけない」と訳されたここにはパーラル(ללף)という動詞が使われており、その本来の意味はなんと「アブラハムが祈る(創 20:7)」という意味です。つまり空中再臨の人の子イエシュアはアブラハムの子孫「イスラエルが祈らない、祈れない時に来る」ということです。イスラエルの民の祈り、彼らが集まりその祈りを行う場所はエルサレム神殿であると定められており、イエシュアご自身もこれを指して「祈りの家」と呼ばれました(イザヤ 56:7、マタイ 21:13、マルコ 11:17、ルカ 19:46)。かつてソロモンによってその第一神殿が、そしてゼルバベルによって第二神殿が建てられ、現在それらは破壊されましたが、わずかに残った神殿の城壁「嘆きの壁」の前で、人々は今日も祈っています。しかしその祈りがやめさせられる、できなくなる日が来ます。それは預言者ダニエルが書き記したイエシュアご自身も引用された「荒らす忌まわしいものが聖なる所に立つ」時です(ダニエル 9:27、マタイ 24:15、マルコ 13:14)。やがて黙示録の獣、不法の子とも呼ばれる反キリストという存在が現れます。そしてエルサレムに来てイスラエルの主に祈ること、礼拝することをやめさせます。それが「思いがけない時」という言葉に秘められた神のご計画の時であり、その時イエシュアは私たち教会をよみがえらせ、天に引き上げるために、人の子は「泥棒」のように来られるのです。

このように、今日の箇所もまた私たち人が犠牲を払ったり、人が努力をしたりすることが命じられ、そのようながんばった者が救われるというような教えではなく、神である主が、イエシュアご自身が、いつ、何を、どのようになされるのかという、ただ神によって成し遂げられる神のご計画が奥義として記された箇所であるということをぜひ覚えていただきたいです。ですから実際に天に宝を積むのは私たちではなくイエシュアご自身であり、それは私たち教会をよみがえらせ天に引き上げる「携挙」を表しているのです。そしてその御言葉のとおりイエシュアは成され、成し遂げ、成就、完成されます。私たちできることはただその日が来ることを知り、覚え、信じて待ち望むことだけです。また伝える機会があるならば伝えてまいりましょう。聖霊の助けがありますように、主イエシュアの御名によって、アーメン。